

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2014

課題番号：26590236

研究課題名(和文) 発展途上国における教員養成の自律的改善の取り組み支援モデルの研究

研究課題名(英文) Study on model of the support to the actions of the autonomous improvement of the teacher education in developing countries

研究代表者

棚橋 健治 (TANAHASHI, KENJI)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：40188355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本事業は、発展途上国における次世代育成のシステム改善を支援するモデル構築を図るもので、中米ドミニカ共和国と共同して教師教育の改善を図るため、以下の事業を行った。

ドミニカ共和国サントドミンゴ自治大学(UASD)において同大学教員等を指導した。UASD教員を広島大学に招聘し、研修を行った。UASD教員の授業研究能力向上のための資料ならびに国際版授業研究マニュアルを作成し、一部をスペイン語翻訳、英語翻訳した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop a model to assist in the improvement of teacher education in developing country as a joint project with the Faculty of Educational Science of the UASD in the Republic of Dominica. Hiroshima University studied and developed a training program that can contribute to the improvement of the teacher education program and lessons in the UASD.

研究分野：教科教育学

キーワード：教師教育 教員養成 教員研修 ドミニカ共和国 教科教育学 授業研究

1. 研究開始当初の背景

中米ドミニカ共和国の教員養成の中核を担うサントドミンゴ自治大学教育科学部(UASD-FCE)は、1970年代より今日まで同国の新採用教員の5割以上を輩出する国立大学であり、また、同国の教員養成に携わる大学教員の多数を輩出してきた。ドミニカ共和国の学校教育はこの教育科学部に支えられていると言っても過言ではない。

UASDにおける教員養成の質的向上は、将来の小・中・高校における現職教員の資質・能力を向上させるばかりでなく、他大学等で行われている教員養成の質をも向上させると考えられる。このことはドミニカ共和国の小・中・高校教員の質の向上は、教師教育者(teacher educator)である大学教員の資質・能力の向上により、自立的・持続的なものになり得ることを示す。

2. 研究の目的

本研究は、研究代表者による先行研究として実施した中米ドミニカ共和国の教員養成の中核を担うサントドミンゴ自治大学教育科学部(UASD-FCE)の教員養成教育・研究改革支援を、UASD-FCEの自立的・自立的・持続的なものとするためのマニュアル作成、モデル構築を行うものである。

それを通して、教育分野での国際協力の重要性が言われる現在の国際社会にあって、教育立国に成功した日本が、その成果を世界に発信する一方途として、ドミニカ共和国を含む発展途上国における次世代育成システムの改善を支援するモデル構築を図るものである。

3. 研究の方法

本研究では、日本の教科教育学ならびに教育学研究者チームが、UASD-FCEの当該領域教員と協同して、ドミニカ共和国における学校教育ならびに教員養成、教員研修の課題を検

討し、改善策を考察し、UASD-FCE教員自身が自立的・継続的にその資質・能力を向上させられるように支援した。具体的には、

a. 広島大学教員の指導による UASD-FCE 教員の研修を実施した。

b. aの研修を通して、UASD-FCE教員の課題を広島大学と UASD が協同して解明し、その改善策を検討した。

c. 検討した改善策を実質化するとともに持続的なものとしたためにマニュアル化、モデル化した。

4. 研究成果

主たる研究成果は、以下の4点にまとめられる。

(1) UASDにおける2回の研修では、「授業における省察」についてのパネルディスカッションにおいて、広島大学、UASD双方よりパネラーが登壇・討論し、UASD教員、学生がそれらの視点を獲得する機会となった。さらに、パネルディスカッション、教科別協議会等を通じて、参加者の発言などから、UASD側にとっても、協議会が重要であること、協議会から生まれてくるものがありそれが授業改善に導かれること、が実感された機会となったと言える。

広島大学には、授業の観察視点(授業を構成する方法論)、観察記録の取り方、協議会において観察記録と観察視点とを連結させて授業改善のための議論の導き方(そのための授業者、観察者、司会者、助言者の役割)、助言の方法、観察者の協議時の貢献の仕方、などのさらなる助言が求められた。

(2) 広島大学における研修は UASD の事情により、年度当初の予定より少人数の訪問となったが、授業研究について深い討論を行うとともに、附属学校を訪問して教育実習ならびにスーパー・サイエンス・ハイスクールの教育実践等について協議した。さらに、UASD-FCE 学部長からは、教育実習の方法論等

の研修を UASD において実施することを求められた。

(3) 国際協力版『授業研究入門マニュアル』を日本語で作成し、その一部をスペイン語翻訳ならびに英語翻訳した。また、同マニュアルを簡約化したリーフレットを日本語ならびにスペイン語で作成し、2月のUASD研修において同教員ならびに参加学生に配布し、高い評価を得た。

(4) UASD 教員ならびに学生の研修への積極的な参加を期待したが、各回とも会場教室の定員以上の参加があり、また討議は授業研究の本質に関わるものとなり、事業の効果は所期の見込み通りとなったと判断できる。

『授業研究入門マニュアル』は、広島大学大学院の多くの教員を研究協力者として作成された。マニュアル執筆者は、桑山尚司、鈴木由美子、木村博一、山崎敬人、竹下俊治、木下博義、小山正孝、影山和也、棚橋健治、草原和博、岡村美由規、岩田昌太郎、齊藤一彦、丸山恭司、吉田成章であり、これら執筆者の専門領域は、教育哲学、教育方法学、学習科学、教科教育学など広範である。

『マニュアル』の特色は3点にまとめられる。すなわち、

第一に、教師教育者対象のマニュアルであることである。

本マニュアルの開発にあたって、海外で授業研究を実施しようとする教師教育者を対象とした。海外での授業研究は、小・中・高等学校等の現職教員研修の手法として導入されていくことが多く、各国の教員養成課程を担う教師教育者を対象とする取り組みはこれまで十分ではなかった。こうした現状に対して、本マニュアルの対象を教師教育者とすることは大きな特色となった。

第二に、国際版としての性格を持たせたことである。

本マニュアルの作成にあたっては、できる

だけ日本の授業研究における歴史性や社会文化性を前提としない記述を心がけた。特に骨格となる「ステップ及びキー・ポイント」部分は、国や社会の相違を超えて理解できるものとした。また、用語や文章構造等は、様々な言語への翻訳を前提にして、文意が明確になるようにすることを執筆・編集方針とした。

本マニュアルの作成にあたっては、できるだけ日本の授業研究における歴史性や社会文化性を前提としない記述を心がけた。特に骨格となる「ステップ及びキー・ポイント」部分は、国や社会の相違を超えて理解できるものとした。また、用語や文章構造等は、様々な言語への翻訳を前提にして、文意が明確になるようにすることを執筆・編集方針とした第三に、入門版としてのわかりやすさを追究した。

本マニュアルは、海外で初めて授業研究に触れる教師教育者にもわかりやすいものとして構想した。したがって、特に手順を記した「ステップ及びキー・ポイント」では、仲間づくりから説き起こし、平易な記述を心がけている。各ステップの「キー・ポイント」と「解説」は見開きとし、一瞥してわかりやすくなるようにした。また日本では多様な授業研究の場があるのに対して、ドミニカ共和国をはじめ、一般的に海外諸国では日本ほど授業研究の場があるわけではないので、共同研究の中で示された、授業研究を始めようとする海外の人がよく抱く様々な疑問については、「Q&A」で重層的に回答するようにした。各ステップの要所に配した「コラム」には、少しずつ経験を積んでいく人の参考になるように、詳細な解説や事例を示した。そして、冒頭の「なぜ教師教育者に授業研究が必要なのか」で根底にある理念を示し、授業研究の指針となるようにした。

本マニュアルでは授業研究を6つのステップ、すなわち、(1) 授業研究の組織を作る (2) 事前協議会を行う (3) 研究授業を実施

し、観察する (4)事後協議会を行う (5)自分の授業を見直し、改善していく (6)授業研究の仲間を増やし、広げるに分け、各々のステップについて、キーポイントを明示した。

一例として、第一ステップでのキーポイントを挙げておく。

(1)授業研究の組織を作る

授業で悩んでいる 最初は気軽に話ができる 仲間を探そう。

授業で尊敬できる できたら上手いと噂の 仲間を探そう。

と の仲間でスタディ・グループをつくろう。目的は、もっといい授業ができることで、「自分」も「学生・生徒」も成長するために。

まずは、思いついたときに、仲間で互いに授業を見せ合おう。

機が熟したら、日時や曜日を決めて定期的に授業を見せ合おう。

授業を見たら、「技」を盗もう。最初はこっそりと。次第に声に出して、盗んだモノを告白しよう。

技だけでなく、そのバックにある「思想・理念」(なぜそういうことをしているのか)も考えよう。

受け取るだけでなく、フィードバックもしてあげよう。相手が喜ぶように。互恵的な関係を築こう。

6つのステップは、授業研究の一通りの流れを示し、それぞれのステップはさらに具体的な活動であるキー・ポイントから構成される。キー・ポイントはそのステップがもつ目的を達成するための活動チェックリストとしても使うことができる。

本年度の研究では、開発したマニュアルを用いて、ドミニカ共和国で授業研究を試行的に実施した。今後、新たな共同研究として、その定着度や効果を調査・検討する計画であり、それらを通して、マニュアルの

充実を図る計画である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

桑山尚司、棚橋健治、岡村美由規、丸山恭司ほか「国際協力版「授業研究入門マニュアル」の開発(2)」広島大学大学院教育学研究科『共同研究プロジェクト報告書』第13巻、査読無、2015年3月、113-120頁

桑山尚司、岡村美由規、丸山恭司(以上、研究協力者)「国際教育協力における授業研究の射程：ドミニカ共和国サントドミンゴ自治大学教育科学部による授業改善の取組を事例として」『広島大学大学院教育学研究科紀要・第三部、教育人間科学関連領域』63号、査読無、2014年12月、131-140頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

棚橋 健治 (TANAHASHI KENJI)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：40188355